

STAP 細胞は本当に存在するのか？

この1月のNatureに掲載されたSTAP細胞に関して、胎盤にも分化できるし、がんにもならない、ということで夢の幹細胞としてメディアは大騒ぎして、論文の著者を神の如くに取り上げ、救世主のように報道してきた。白衣も割烹着だ、と何から何まで、いい方向に解釈して誉めそやした。しかし、いったん疑義（文章がNIHのホームページのとそっくりだとか、あちこちの論文からの無断引用だとか、無関係の論文の写真を使いまわした、などなど）が発覚すると、いつものように、掌を返して攻撃に変わる。正義漢面して、STAP細胞の存在は忘れてしまって、現在の彼女ではなく、過去の事情まで掘り出して、今や「彼女の人格攻撃」に変貌する。日本中に「俄正義漢」が急増して人身攻撃をする。しかも匿名で。——こういう薄汚い連中は大嫌いだ。

われわれの興味は、彼女の人となりや来し方ではなく、STAP細胞が「思っていたよりも簡単にできた」ことにあった。この騒動にどのような決着がつくのか知らないが、下手をすると、彼女の人格が荒廃しきって、廃人に近い状態になるのではないかと危惧するものである。

所属先の理研の調査委員会は、わずか1ヶ月あまりで、「写真の改竄・細胞の捏造」とまで言い切った。つまりはデッチあげ。この結論には、えらい早いなあ、と思わざるを得ない。のちになると、さらなる疑義が露わになった。

これを否定するには、同じ条件で、他の研究施設から続々とSTAP細胞ができた、という報告があればすむことだ。実験ノートに、もしSTAP細胞ができたなら、「ついに完成した！」と大書しているだろう。……。どうもはっきりとした実験ノートがないらしいし、日付もはっきりしないらしい。「ワタシのところではできない」というのは、科学の観点から見れば信用できない。それを証明するなら、調査委員会の眼前で、STAP細胞を作って見せればいい。……。どうもその機会さえ与えてもらえないらしい。……。剽窃改竄捏造とまで言い切っている。

理研副センター長の笹井某の会見では、「自分は名前を連ねているだけであり、……」とまったくの逃げ腰。科学者の姿勢でいえば、まあ、卑怯で失格である。

まったく別の事象の証明に使った写真を使いまわすのはおかしい。「単なる間違い」というのもおかしい。あやふやな写真にNatureのレフェリーも気付かなかったのか？

笹井某は、STAP 細胞という言葉を使わずに、「STAP 現象」と表現したが、これは用語として間違っているのではないか？

現時点では、「STAP 現象」というのは、「他人の書いた文章を剽窃し、写真の使いまわし、証拠写真の改竄やなかったことを捏造すること。」という意味ではないのか。

永遠に追いつけそうも無い「山本夏彦さん」が書いた一文。「人はどこまで無実か？ -----悪事が露見するまで」……これは山崎豊子さんが、2 回目の他人の文章を盗用したときの表現であるが、笹井さんの話を聞いていると、なにやら、バレたら謝ったらええねん、という姿勢が垣間見える。

科学雑誌ニュートンに、すべての哺乳類では、一個の受精卵から発生・分化してきた細胞は、原則として「一方通行であり、未分化の状態にもどることはない」とある。例外はある。たとえばリンパ球である。もう 40 年以上も昔。血液の細胞を組織培養すると、リンパ球のみが生き残って、じっとしている。ところが、これに PHA などの特殊な物質を添加すると、リンパ球が若返り、未熟な細胞に変化する。画期的な発見である。——初め、ボクは、STAP 細胞とは、このリンパ球のようなことがいろんな細胞で発生し、受精卵や ES 細胞などに限りなく近づいている物だと漠然と考えていたのだが、どうも違うようだ。リンパ球の若返りの時でも、いろんな条件を試しているはずだ。たとえば、組織培養液も確立されたものはなかつただろうし、試行錯誤の連続だつただろう。実際にそうかどうかは知らないが、STAP 細胞作成のときとよく似た条件での培養もあつたはずである。

このあたり、情報が錯綜していて理解しにくい。STAP 細胞が存在するものならば、もっと堂々としてその存在を証明すればいいだけではないか。

クローン羊のあと、しばらくクローン動物はできなかつたが、今回の共著者の若山教授がクローンマウスを作成して初めて羊も認められた。そういう意味では、もう少し時間の猶予を与えるべきではないか。捏造と断定するのが早すぎるような気がする。再調査も必要なし、というのも、なにやら政治的配慮が働いているようで、愉快ではない。ここで唯一信頼できるのが、若山教授の「論文撤回」勧告である。

その後、当の調査委員会のメンバーの写真の改竄が発覚するわ、ノーベル賞の古い論文からあらさがしをして、謝罪会見をさせるわ、実にしょうもない問題にすり替わってしまって、すこしも楽しくない。そんなことを言い出したら、臨床の論文なんかあら

さがしをしたらほとんど全部になってしまうのではないか。アイデアは他人のもの、これを少し改変して自分が作成したように恥ずかしげもなく堂々と発表していたのを見てきたし、他人の仕事を横取りしようとした者もいるし、まあ、改竄・捏造には「慣れている。」実に、無意味な騒動ではある。

文章の盗用やデータの改竄はアカンし、デッチあげも当然アカンけど、写真の改竄はアリだと思っけどなあ。なぜなら、文章で表現し切れないところを付図として見せて理解しやすくするのだから、適当とまでは言わないが、わかりやすくする程度のことにはかめへんように思う。そうだから、調査委員会もノーベル賞も改竄あり、になったはずである。

以下とりとめのないことを書きますが、たとえば見合い写真がそうですやろ？一見した時点で断られるよりも、いっぺん会うてみよか、と思わせるのがこれやねんから。「修正」といいながら実際は「改竄」やろ？それがいやなら、見合い写真はアカンベ一をしたときの写真！に限るとか決めればいい。

さらに、「STAP 細胞は存在しない」ことの証明は難しいで。宇宙人はいるかどうか、いるという場合は証拠写真を見せればすむ。信用するかどうかは別だが。ところが、「存在しない」ことの証明は困難きわまりない。宇宙の果てまでさがしまわって人語を解するかどうかまで確かめて、……というなら、生きている間には無理やな。100年1000年経ってもアカンかもしれん。「悪魔の証明」だ。

STAP 細胞は存在します、ワタシは 200 回以上つくりました、とオネエチャンが言う。禁煙の回数じゃあるまいし。歴史的な業績の論文の写真を勘違いで間違えました、も胡散臭いと言われても仕方がないところ。…こういうしょうもない事柄に変に熱中する輩がいて、「匿名」で告発しよる。この方が卑劣だ。

現時点では、STAP 細胞側が土俵際まで押し込まれているところである。しかし、事ここに至ったら、「それでも地球は動く」しかないだろう。若山教授の論文撤回の呼びかけは、真摯に受け止めねばならないだろう。

それにしても、他人の、しかも本人も忘れていたような古いものから些細な失策を探し回っている連中は、何を思っているのだろう。この忙しいのに、何遊んどんねん。もっと自分の仕事があるやろが。

しかしまあ、泰山鳴動マウス一匹。不毛な騒動ではあった。……………本人にして

みれば死活問題やけど。

2014.05.27.

そして小保方さんは、ついに論文撤回に合意した。無念やるかたなしだろう。